

親の「語り」を通した子育てにおける「学び」に関する考察（2）：クラス別懇談会での親の「語り」の変化に着目して

永田, 誠
大分大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/6787156>

出版情報：生活体験学習研究. 20, pp.27-35, 2020-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



親の「語り」を通した子育てにおける「学び」に関する考察 (2)

— クラス別懇談会での親の「語り」の変化に着目して —

永 田 誠*

Parents' Learning in the Process of Bringing up a Child (II)

— Focusing on changes in parental narratives at class meetings —

Nagata Makoto*

要旨 本研究は、201X 年度前半期（5 月）— 中間期（10 月）— 後半期（3 月）に開催された A ことども園におけるクラス別保護者懇談会における親の「語り」を①子どもの生活に対する親の関わり、②親の仕事・生活と子どもの生活との関連、③自身の言動・関わりに対する振り返りと改善の 3 点から、どのように変容しているかを考察した。

親の「語り」からは、①保護者懇談会が子育てや生活のありのままを表出する自己開示の場となっている、②保護者懇談会は、他者へ自己の子育てを語る場であるが、同時に自己にも問いかける内省的な場ともなっている、③懇談会で「語る」ことで、親としての存在・役割を感取する、の 3 点が見て取れ、幼児への見方や親自身の言動が変容する「学び」の過程が示唆された。

キーワード 子育て 親の学び 保護者懇談会 保育参加 「語り」の変化

1. 研究の問題と目的

本稿は、201X 年度前半期（5 月）— 中間期（10 月）— 後半期（3 月）に開催された A ことども園におけるクラス別保護者懇談会における親の「語り」を検討することで、子どもへの見方と親自身の認識・関わりがどのように変化したかを考察することを目的とする。

幼児教育・保育ではヘックマン（2015）らの研究成果に注目が集まる中、2018 年度に改訂された幼稚園教育要領等では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。その理論的背景となった OECD『Starting Strong』では、「質の高い保育（ECEC；Early Childhood Education and Care）」が提起され、具体的な政策提言項目の第 7 に「乳幼児期サービスに家族とコミュニティの参加を促す」（OECD 2011）ことが示されており、親の保育参加

は説明責任・リスクマネジメントといった消極的側面にとどまらず、「親の養育力の向上」と「保育の質の向上」を共に実現する可能性も有している。加えて、保育における保育者と親の協働は、保育・子育て支援をサービス関係から脱却し、親の成長や学びを促す教育的要素を付加した実践の萌芽も見られている¹⁾。実際に、日本でもドキュメンテーションや「学びの物語²⁾」といった諸外国の保育実践を導入する園も増加しており、これらの実践の理念的支柱である親同士や親と保育者の協働的關係は、子育て過程における生活の自覚化や子ども理解深化のための経験的な「学び」の萌芽を支える基盤となる。

幼児期における「学び」を検討するにあたっては、それを支える家庭・地域の存在・関わりも重要な要因となるが、それらの教育基盤の形成過程に関する

*大分大学教育学部

連絡先：〒870-1192 大分県大分市旦野原700 E-mail: m-nagata@oita-u.ac.jp

TEL・FAX：097-554-7559（研究室）

実証的な研究蓄積は浅薄であり、特に親（家庭）を含めた生活全体で捉える視点は乏しい³⁾。「家庭教育支援の推進に関する検討委員会報告書」（2012）を契機に着目された「発達資産（Developmental Assets）」（Benson 2003）においても、その後、継続される研究は稀少である。

汐見（2016）は、「形成と教育」と「子育て」を巡る論点として、以下の点を指摘する。

倉橋の議論を引き継ぎつつ、保育をより科学的根拠を持ったものに発展させるには、子どもたちの自己選択による遊びあるいは仕事への参加（手伝い）などの中で（を通じて）、子どもの中に何が育つのか、逆に言えば何が育たないのか（形成過程での育ちの実態）を分析することがとても大切な課題になる。しかし、この分析はその後保育の世界では必ずしも十分に行われてきたとは言えない。少し広げて言うと、宮原のように、教育を、子どもの自生的な育ち、すなわち「形成」過程に注目し、その「統御」として意味づけると、その「形成」過程の評価が理論的にも実践的にも前提的な課題になるのだが、それは保育の世界では、倉橋の後もすぐに課題にならなかったということである⁴⁾。

この汐見の「形成と教育⁵⁾」への着目は、「子育て」を経験主義・児童中心主義の側面から教育的営為として再定位しようとしたものである。一方で、「形成」の前提となる社会的環境、自然的環境が大きく変容し、「教育」における社会的関心の高まりを背景とした他者による意図的なかわりが増大し、多様なものへと変質する現代において、どのように「統御」していくかも問う。換言するならば、保育・家庭教育を「子育て」という教育的営為から総体的に捉えることで、「形成」される子どもの「学び」と、「統御」する意図的な働きかけである「教育」の主体となる大人の「子育て」という社会的実践（共同体）への参画による「学び」の双方向の関連性を検討することが求められる。したがって、本研究では、保育・家庭教育を「子育て」という教育的営為から総体的に捉え、大人の「学び」を把握することを目指す。

2. 研究方法

研究の方法としては、A園におけるクラス別保護者懇談会での親の「語り」をICレコーダーで記録した上で逐語録を作成し、分析資料とした。逐語録については、ありのままの親の「語り」を分析資料とするため、修正は最小限にとどめた。その上で、親が自身の子どもの家庭での生活の様子や日常において気になっている子どもの言動や園での様子等について語る場面を抽出し、発言した親ごとに「語り」の内容を検討した。

子育てにおける親の「学び」の分析は、親へのインタビューによる先行研究が大半を占めており、本研究のように「語り」の変容を縦断的に分析するのは稀有で、方法論が確立されているとは言い難い。また、インタビュー調査の特質として、場や状況による影響に加えて調査者の存在・意図も介在するため、被調査者である親は、意識的・無意識的に看取しながら回答することになり、親自身に「よい親」「望ましい発言」に導く危険性も孕む。そのため、調査者は発言・介入はできるだけ避け、「語り」を聞くことに重きを置くとともに、ありのままの親・保育者の「語り」の記録を、あえて分析資料として用いた⁶⁾。

研究対象は、201X年度に開催された3回の懇談会すべてに出席した保護者33名を対象とした。内訳は、0歳児2名、1・2・3歳児各6名、4歳児4名、5歳児9名であった。年度途中での入退所があるため正確な数値とは言えないが、対象者の割合は、全体で28.9%となり、所属世帯数の1/4を超える。各クラスの割合を見ると、感染症により欠席児童・保護者が多かった10月0歳児クラス、転園の

表1 対象者（世帯）の内訳*

クラス	対象者（世帯）数	対象者（世帯）数／平均所属世帯数
0歳児クラス	2	15.0%
1歳児クラス	6	26.1%
2歳児クラス	6	30.5%
3歳児クラス	6	28.6%
4歳児クラス	4	19.7%
5歳児クラス	9	52.9%
全体	33	28.9%

※201X年度の懇談会すべてに参加した保護者（世帯）

ために欠席者が多かった3月4歳児クラスが低い一方、5歳児クラスは52.9%と半数以上の保護者が3回すべてに参加している。（表1）

3. 本研究を遂行するに当たっての倫理的配慮

本研究を遂行するに当たっては、相手方の同意・協力ならびに個人情報の取り扱いの配慮を必要とする内容が含まれており、研究対象園ならびに対象者への倫理的配慮として、以下の5点の対策と措置を講じた上で、調査研究を実施した。

- ①調査研究の計画・申請時に、研究対象園に内容の確認ならびに申請の承諾を得た。
- ②本研究に継続的に調査協力する園とは、就園児の保護者から「個人情報の取り扱いに関する同意書」を園が得ていることを前提に、調査者の所属機関と調査対象法人との間に「秘密保持契約書」を締結した。
- ③調査実施前には、改めて対象園に具体的な調査内容・方法についての説明を行い、調査実施にあたっての必要な措置について尋ね、それに従って対処した。
- ④調査内容には個人情報を伴うものが含まれることが予測されたため、調査を実施する際には、調査対象者に研究の概要ならびに「個人を特定されることがないように配慮するとともに、研究目的以外に利用しない」旨の説明を行った。
- ⑤調査によって得た情報は調査者の責任のもと厳重に管理するとともに、研究に関する資料・データは調査者の所属機関の規定に則り保存・保管する。

4. A園における201X年度のクラス別保護者懇談会の概要

A園におけるクラス懇談会は、5月・10月・3月の年間3回計画され、A園保育室にて0歳児から5歳児の順に休日を除いた6日間連続19時～21時の時間帯で開催された。懇談会には、0歳～5歳児クラスに在園する乳幼児の親と園長、担当保育者が出席する。懇談会では、まず担当保育者から子どもの園生活の様子が報告され、その後、親から家庭での生活の流れや子どもの様子が語られる。家庭生活や子どもの様子については、冒頭、園長から「起床・就寝時間」、「食事の時間・様子」、「休日の過ごし方」、「テレビ等のメディア利用」、「子どもの様子で気になること・子育てで困っていること」の5点を話して欲しい内容として提示されるが、これに縛られることなく、親は自由に語ることができる⁷⁾。

201X年度の懇談会の参加者（世帯）数では、全体の参加率は6割を超えており、①保護者の任意参加である、②クラス別に連続6日間で開催され、きょうだい児がいる家庭は週に複数回の参加が求められることなどを踏まえるならば、十分に高い割合と言えよう。クラス別の参加率は5歳児クラス（82.4%）で高く、4歳児（47.5%）、3歳児（52.5%）と比較しても突出している。各回の参加率は、3月が72.6%で最も高くなっており、特に3月5歳児クラスの懇談会には全員の親が参加している。これらの参加率の高さは、園での子どもの様子や他児の家庭での様子を知りたいという意欲の表れと捉えられよう。（表2）

表2 201X年度のクラス別保護者懇談会の参加者（世帯）数・割合⁸⁾

クラス	5月			10月			3月			年間		
	参加 世帯数	所属 世帯数	参加率	参加 世帯数	所属 世帯数	参加率	参加 世帯数	所属 世帯数	参加率	合計 参加 世帯数	平均 参加 世帯数	平均 参加率
0歳児クラス	7	10	70.0%	3	13	23.1%	12	17	70.6%	22	7.3	54.6%
1歳児クラス	13	23	56.5%	12	23	52.2%	19	23	82.6%	44	14.7	63.8%
2歳児クラス	9	19	47.4%	14	20	70.0%	16	20	80.0%	39	13.0	65.8%
3歳児クラス	10	21	47.6%	11	22	50.0%	12	20	60.0%	33	11.0	52.5%
4歳児クラス	10	20	50.0%	10	21	47.6%	9	20	45.0%	29	9.7	47.5%
5歳児クラス	11	17	64.7%	14	17	82.4%	17	17	100.0%	42	14.0	82.4%
全体	60	110		64	116		85	117		209	69.7	60.8%
平均	10.0		54.5%	10.7		55.2%	14.2		72.6%			

5. クラス別保護者懇談会における子育てに関する親の「語り」の変容

クラス別保護者懇談会における子育てに関する親の「語り」が、どのように変容したかを把握する観点として、これまでの知見から、①子どもの生活に対する親の関わり、②親の仕事・生活と子どもの生活との関連、③自身の言動・関わりに対する振り返りと改善、の3点に設定した。(永田 2019b)

クラス別保護者懇談会における子育てに関する親の「語り」の内容を分析するにあたっては、共通のセンテンスを抽出し、____：親自身の想いや認識に関する発言、____：親の思いや認識を促す要因となった状況等に関する発言に分けて下線で示した。

(1) 子どもの生活に対する親の関わり

● 事例1：【1歳児女児a 母親】食事に関する「語り」から

5月	食事の方は、固いものとかは食べないというか、噛み噛みはするんだけど、飲み込めなかったらほったのところにあるか、出しているかですね。この間、「食べた、食べた」と思って、「あ、すごいやん」って言って、ごちそうさまをしたら、全部下に出して「あれ」っと思って。(中略) どちらの椅子で食べさせても立つんで、「座って」って言ったら座るけど、立っちゃう。立って、イヤイヤなったら、後ろにひっくり返る感じで。でも、食べたい。でも、やらなかったら怒る。でも、相性が悪かったら出すみたいな。だから、ちょっと好きなものを。「これは食べそうだな」っていうのを取って。ごめんなさい、やっています。手づかみ食べも、前、言ったように、頑張りますって言ったんですけど、一週間に一回あるかないかで、家では食べさせる方がほんとにちょっと多いですね。
10月	ご飯も以前は食べさせることが多かったんですけど、だんだん自我が出だして、自分で食べさせるようにして、あとは大変ですけど、それを早くすればよかったなって思うくらい。やっぱり自分が楽になるの。(中略) ご飯粒だけがダメで、納豆が好きなので、納豆を混ぜると食べる。だけどそれが毎食ってなるとなかなかちょっと。(中略) でも、おかずをやるとおかずしか食べなくなるんで、なんとかご飯を野菜と混ぜたりとかしてやるんですけど、

10月	野菜だけとってご飯が残る。それで、あとはお茶入れて遊ぶみたいな。そのサイクルでいつも「お替り」って言ってくるんで。いつもそれに負けて、納豆あげたり、ふりかけかけてみたり、いろいろするんですけど、それが悩みになって。
3月	食事は、芋とか人参とかは食べるんですけど、あとはご飯とかに混ぜてやっても食べなくて。仕切りがないようにワンプレートで全部出すんですけど、もう全くぜんぜん。納豆とか混ぜれば、なんとか食べるんですけど。芋とか人参とかは食べるんです。だけど、別の野菜の固体はまったく食べないので、今そこが悩みかな。なので、朝ご飯も全部納豆ご飯とお味噌汁とか。そうじゃないとご飯が食べなくて。夜ご飯とかだいたい週末は、みんなで一緒に食べるようにはしているんですけど、週末、一緒に食べる時も、自分の席から立とうとして、私のところに来よう、来ようと泣き叫ぶから、「そんなやったらやらん」って言って、ごちそうさまをさせるんですけど。それでも泣き叫ぶって分かっているけど、下に降ろして。やっぱり抱っこしていると落ち着くから、そこでやらせるけど。あんまりそういうのをしたくないから、なるべく食べなかったら「もう終わり」っていうふうにはしています。

事例1は、1歳児a児の食事に関する親の関わり事例である。a児の好き嫌いや食事の立ち歩き、遊び食べに対して、親は「きちんと食べさせた」という思いを持つが、なかなかうまく対処できないことに悩み、試行錯誤する様子がうかがわれる事例である。5月の段階では、「これは食べそうだな」というのをあげたり、食べさせたりしていたが、10月の懇談会では、a児の自我の芽生えを契機に手づかみ食べにチャレンジすると、片付けは大変ではあるものの、自分自身の手間や子どもとの駆け引きが減った実感語り、保育者からの助言も受けつつ改善を図っている。ただ、10月・3月の懇談会においても、引き続きa児の食事を語っており、好き嫌いや遊び食べをせずに「食べて欲しい」という思いを持ちつつも、子どもの様子を見ながら食事を切り上げるという手立てを試行している。

a児の親は「食べて欲しい」という思いはあるものの、子どもの自我の芽生えをきっかけに食事の自

立を図るために自らの思いを抑え、「親が食べさせる」(5月)から「好きなものを自分で食べる」(10月)、それでも食べない時は「食事を切り上げる」(3月)と関わり方に変化が見られている。また、5月の懇談会では、手づかみ食にチャレンジできずに「食事の関わりがうまくできていない」思いから「ごめんなさい」と謝罪の言葉を伝えており、園を外側に置いた存在として語っていたが、10月・3月の懇談会では、「～が悩みかな」、「〇〇しています」と自分の思いをありのままに語っている。子育てでうまくいかない状況を親自身が享受するとともに、子どもの姿が変化したことで、助言を仰いだ園・保育者への心的距離にも変化があったと推察される。

(2) 親の仕事・生活と子どもの生活との関連

● 事例2：【4歳児男児b 母親】親の仕事と子育てに関する「語り」から

5月	最近お迎えが仕事の都合で遅くなっているので、7時ぐらいにしか迎えに来られてないので、帰ってバタバタご飯食べてお風呂に入って。(中略)夜、寝るのは、時間がないので、9時にやっとお布団に行って、そこから寝るので。(中略)朝も7時過ぎには保育園に来て。すぐ私が出ないと仕事に間に合わないの、朝の体操ができてマット1つぐらいなので。どうにかマットと親と一緒にしなきゃいけない手押し車ぐらいは一緒にしてあげたいなと思っているので、もうちょっと朝来る時間を早めにと考えているところです。(中略)朝ご飯も時間がないのに、なかなか食べないので、最近、怒ることといたら「食べなさい」、「時間かかりすぎよ」ということばかり言っているような気がします。(中略)成長したのかなと思う反面、こっちが「お兄ちゃんだから」と求めすぎていて、「そうしないといけない」と思わせすぎているのかなって、最近すごく思うことがあるので、bの気持ちを尊重しつつ、時には甘えさせてあげたりとかしないといけないなと日々反省しているところです。
10月	日々の生活は、家でも自分のことは自分で言わなくてもほとんどやってくれるようになって。お手伝いもいろんなことをしたいんですけど、私に余裕が無かったりとかで、ばーって私がやった方が早いので、なかなかさせるこ

10月	とができていないのが現状です。bの問題というよりも、なんかもう私の母親としての余裕とかが無かったりとか。全てにおいて。食べる物についても早寝早起きにしても、最近できてないなと思うので、私が母親としてもっと頑張らないといけないと日々思っているところです。
3月	私も初めての子育てだったので、「しっかりした子に育てたい」という思いが強すぎて、「すごい厳しく育てすぎたな」と今、振り返って思っている。下の子の今の成長と比べると、なんかbはあんまりワガママとか言わなかったなと思って、すごく今、反省しています。時々、私のことを突然叩いたりとか、蹴ったりしてることが続いたので、「ちょっと話そう」と言って話したら、「ママにギョってして欲しかったんだ」と言ったので、「じゃあ、そうやってbが突然叩いたりとか、蹴ったりした時には、ママがギョってしてあげたらいいの?」って言ったら、「うん」と言ったりとか。あと、寝る時にどうしても下の子がワガママで、私がそっちを向いてないと嫌がるので、bにいつも背を向けていたんですね。授乳している時から今もずっとなんですけど、そしたら最初は3人で寝ていて、パパと一緒に寝なかったんですけど、途中ぐらいから「パパ、一緒に寝て」と言い出して、「何で?」って言ったら、「自分の方を向いて、ちゃんと寝てほしい」と言うので、多分、そういう思いがずっとあって、なかなか甘えられないんだと思うので、そこは心配していて、もう遅いかもしれないんですけど、ちゃんとbのことも見てあげたいなと思っているところです。

事例2は、親の仕事と子育ての両立に関する4歳児b児の母親の語りである。b児の親は自身の仕事の都合で、帰宅後の生活が遅くなり食事や入眠時間が遅くなる、登園時の体操等ができないことなどを改善したいと感じている。そのため、朝食時も急かせる発言が多くなり、「bの気持ちを尊重」したいと思うものの、余裕がない状態が10月まで継続している。加えて、日頃のb児への関わりが、『お兄ちゃんだから』と求めすぎていて、『そうしないといけない』と思わせすぎている(5月)、「家でも自分のことは自分で、言わなくてもほとんどやってくれるようになって」(10月)とb児への要求が強い傾

向にあったことを自認する。しかし、3月の懇談会では、子どもが叩いてきた行動から子どもの伝えられなかった思いを知り、『『すごい厳しく育てすぎたな』と今、振り返っていて思っている』とb児への見方や期待を内省し、『なかなか甘えられないんだと思う』、『ちゃんとbのことも見てあげたい』と語り、自身の子育て観と関わりを改めようとする意志が読み取れる。

この事例からは、『仕事はしなければならない』が、『子どもにもゆっくり向き合いたい』という仕事と子育ての両立という狭間で悩む親の姿がうかがわれる。b児の親に限らず、子育てと仕事・生活の両立が求められる親たちは、忙しい日常の中で、保護者懇談会が子どもの様子や自身の関わりを振り返る機会にもなっている。b児の母親も、5月は子どもに対する期待や課題を述べているが、10月、3月と時間を経るにしたがって、子どもの言動の背景に自身や家族の関わりが要因として潜在していることに気づき、子どもではなく自身の課題として捉えた『語り』に変化している。つまり、懇談会において『語る』ことは、日々の自身の言動や我が子に対する関わりを振り返り、行動を改善する意思を言語化する契機となっているのである。

(3) 自身の言動・関わりに対する振り返りと改善

● 事例3：【4歳児女児c 母親】姉妹喧嘩への関わりの『語り』から

5月	今まで、私が甘やかしていたということもあるんだろうけど、そういう時にどう声を掛けたら。 <u>手を出したのは、cが先なので、「なんで手が出たのかな」という話はするんですけど、なかなか分かってくれないのかなって。私も口調が激しいので、それでちょっと気持ち的に縮こまっているというか、怖い感じになっているのかなって。自分の接し方は気を付けないといけないと思います。言葉遣いが悪いので、自分も気を付けます。私の口調が移ってないかが心配です。お友だちと接している中で、人のことは気になって、できてないところは、「これせんといけんね」とか「姉ちゃん、あれできてないやん」とか言うんですけど、自分のことができてないのに、人のこと</u>
----	--

5月	<u>を言ってくるんですよね。「じゃあ、cはできているの」と言っていると、できてないことが多いので、そういうところもちょっと話していきたいなと思っています。「じゃあ、cちゃんがやってみようか」、「準備ができてないから、まず、してみよ」という感じで、声をかけていたら。優しく言ってみたいと思います。</u>
10月	<u>姉とよく遊ぶんですけど、やっぱりケンカが多くて、お姉ちゃんもやっぱり口が達者なので、結構言われて、泣いてっていう感じで、やっているんですけど、私からも言われて、お姉ちゃんからも言われてみたい感じで、結構肩身狭い感じで遊んでいます。仲いい時は仲いいんですけどね。上手に遊んでくれるといいかなと見守っています。</u>
3月	<u>お姉ちゃんとのトラブルが結構前からあるんですけど、やっぱりお姉ちゃんに矛先を私が向けていたので。いつもお姉ちゃんにまず理由を問いただすんですけど。今、「お姉ちゃんはどう言ってるんだけど、cちゃんはどう思う」とって意見というか、どうしてこうなったのっていうことを聞くようにしています。ちょっと前までは、お姉ちゃんばかり責めていたので、「なんかちょっと甘やかしすぎたかな」という感じで、ワガママになっていたのも、2人ともを同じように聞くように、今、意識しています。園でもあるみたいなんですけど、嫌なことがあったりすると、何も言わないで涙を流してじーっと待ってということが、やっぱり家でもあって。話し出すまで時間がかかるんですけど、「お姉ちゃんに、こうされた」ということもちゃんと伝えて。自分が「じゃあ、その後、どうしたの」と言ったら、「叩いた」とか「つねった」とか、そんなこともチョイチョイ言ってくれるようになってるので、ちゃんと話を聞いてあげるっていうのが大事かなって思います。</u>

事例3は、4歳児女児cと姉との喧嘩への親の介入に関する事例である。母親はc児に普段から対応が甘くなっていると自覚している一方で、きょうだい喧嘩に介入すると、c児に親の思いがうまく伝わらず、口調が強くなってしまい、結果的にc児は『気持ち的に縮こまって』萎縮し、親の思いとは異なり『怖い感じになっている』と感じていた。そのため、5月の懇談会では、『自分の接し方は気を付けな

いといけない」、「言葉遣いが悪いので、(中略)私の口調が移ってないかが心配」と語り、自身の改善の必要性を認識し、『「じゃあ、cちゃんがやってみようか」、「準備ができてないから、まず、してみよ」って感じで、(中略)優しく言ってみたい」と語っている。10月の懇談会では、相変わらず姉との喧嘩は続いているものの、親は「上手に遊んでくれるといいかなと見守っています」と語り、これまで介入していた喧嘩を見守るようになっていく。そして、3月の懇談会では、『「お姉ちゃん是这样言ってるんだけど、cちゃんはどう思う」って(中略)2人ともを同じように聞くように、今、意識しています」と述べ、姉と公平に扱うこと、c児の思いを聞くことを意識した関わりへと変化している。

こうした変化を促した背景には、「嫌なことがあったりすると、何も言わないで涙を流して(中略)話し出すまで時間がかかる」というc児の反応が気になっていることがあり、普段の生活の中でも丁寧に観察するとともに、「園でもあるみたい」と把握・情報共有している。こうした試みによって、c児が少しだけ返答するようになったことで、「ちゃんと話を聞いてあげる」ことの大切さを再認識している。この事例3は、我が子の課題を改善するという支援する側の視点と同時に、原因が自身の言動にあるのではないかという内的な課題として捉え、自身の親としての関わりを振り返ることで、親としての存在・役割を問い直し、行動の改善までつながった事例として捉えられよう。

6. 総合考察と今後の課題

本稿では、201X年度前半期(5月)―中間期(10月)―後半期(3月)に開催されたAこども園におけるクラス別保護者懇談会における親の「語り」を、①子どもの生活に対する親の関わり、②親の仕事・生活と子どもの生活との関連、③自身の言動・関わりに対する振り返りと改善の3点から考察した。その結果、親の「語り」の内容から以下の3点が明らかとなり、幼児への見方や親自身の言動が変容する「学び」の過程が示唆された。

第1に、保護者懇談会は子育てや生活のありのままを親が「語る」(表出する)自己開示の場となっていることである。子どもの生活に対する親の関わり

として、a児の自我の芽生えをきっかけに「食べて欲しい」という親の思いを抑え、親としての見極めや関わり方を変化させていることが見て取れた。親は、懇談会において自身の思いや意思をありのままに語ることで、うまくいかない状況を親自身が享受するとともに、懇談会や園での会話や保育者からの助言による子どもの変化を通して、園・保育者への信頼と子どもの見方の変化が生じている。

第2に、保護者懇談会は、他者へ自己の子育てを語る場であるが、同時に自己にも問いかける内省的な場ともなっていることである。親の仕事・生活と子どもの生活との関連では、「仕事はしなければならない」が、「子どもにもゆっくり向き合いたい」という仕事と子育ての両立という狭間で悩むも、日頃忙しく、時間を十分に確保できない中で、懇談会が、その間の子どもの様子や自身の関わりを振り返る契機となっていた。実際に、b児の母親は、懇談会で語ることで子どもの言動の背景に自身や家族の関わりの影響に気づき、語る対象は子どもから親自身へと移行している。懇談会は保育者や他の親に語る場であると同時に内省的な「語り」の場としての性質も有している。

第3に、懇談会で「語る」ことで、親としての存在・役割を感取する過程が推察できた。自身の言動・関わりに対する振り返りと改善では、普段の生活の中で、園とも情報共有しながら、c児の言動を丁寧に観察し、理解しようと試みていた。その過程では、我が子の課題を改善する支援する側の視点から、原因が自身にあるのではないかという内的な課題として捉えることで、親としての存在を問い直し、役割を感取する機能を果たしていた。

これらの結果から、A園におけるクラス別保護者懇談会は、乳幼児の子育て過程における園・保育者と家庭・親の間の信頼関係を結ぶ基盤を形成するための装置として介在していることが看取できた。こうした園(保育者)と家庭(親)との関係構築を果たす外形的要因の一つとしては、年間の平均参加率が60%を超え、特に3月期の懇談会では全クラスの平均参加率が70%を越える懇談会の出席状況があり、「特定の親しか来ない」「本当に来て欲しい親は来ない」といった一般的な保護者懇談会とは位置づけやイメージが異なる。こうした出席率の高さに

は、園での掲示や保育者による送迎時の声かけといった直接的な動機付けもあるが、①園の理念の一つでもある「家庭と一緒に子どもを育てる」という意識が親にも共有されている、②園・保育を理解・共有するために、保育への親の参加・参画機会が多く設けられている、③懇談会や園行事等への参加機会を通して、親同士が普段から会話や情報交換を行う関係が構築されていることの3点が関与していよう。つまり、「子育て」における親の参加・参画、そして、幼児教育・保育における連携・協働による質の向上の過程には、具体的な活動を通じた経験による学習過程が埋め込まれていることが確認でき、こうした親の「学び」の構造は、「正統的周辺参加(LPP: Legitimate Peripheral Participation)⁹⁾」(レイヴ・ウェンガー1993)との接点もうかがわれよう。

最後に、本研究の今後の課題としては、保護者懇談会における親の「語り」の分析視角ならびに方法論の検討が求められよう。子育ては私的・個別的な性格を有する営為であり、それを一般化させることの是非も問われるため、親としての「学び」の筋道を、多くの事例からいかに描き出すかは重要な課題であるとともに精緻且つ多角的な分析が必要となる。また、保護者懇談会における親の「語り」を、「子育て」という教育的営為への参画過程として捉えるならば、その「学び」を促す社会的実践としての保護者懇談会ならびに保育者や園の保育の変化も同時に生起するはずである。親の「学び」と懇談会ならびに保育(者)の成長・改善がいかに連関するかも検討されなければならない。

謝辞・付記

本調査研究への承諾・協力をいただいたA園の園長ならびに職員の方々、そして、クラス別保護者懇談会へ快く受け入れていただいた保護者の方々に改めて感謝申し上げます。

また、本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)「子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」」(課題番号: 15K04309)ならびに科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)「保育参加を通じた親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発」(課題番号: 19K02616)の研究成果の一部である。

本報告にあたっては、両プロジェクトにおける共同研究グループでの議論をもとに執筆した。

注

- 1) 保育における親の参画に関する政策的変遷や諸外国の状況等については、池本(2014)に詳しい。また、保育における学びの可視化と保育の質の向上に向けた取り組みについては、大豆生田(2016)や大宮(2006)等を参照のこと。
- 2) 「学びの物語(Learning Story)」は、ニュージーランド乳幼児統一カリキュラムの評価方法であり、日本の保育現場でも導入が試みられつつある。「学びの物語」の特質は、丁寧な対話と記述による対象者理解の深まりにある。それにより、これまで評価者の主観性から脱却し、子どもの「学びの構え」を適切に捉えることを可能とした。詳細については、M.カー(2013)、飯野(2018)、丸亀ひまわり保育園・松井(2018)、大宮(2010)などを参照のこと。
- 3) 幼児教育・保育における親の保育参加に関する先行研究は、共同研究グループ以外では、島津(2014)、宮本・藤崎(2015)等にとどまり稀少である。
- 4) 汐見(2016)、p32
- 5) 宮原(1949)の「形成と教育」は、①「人間の形成の過程には、(1)社会的環境、(2)自然的環境、(3)個人の生得的性質、(4)教育という四つの力がはたらいている」こと、②「自然生長的な形成の過程を望ましい方向にむかって目的意識的に統禦しようとするいとなみ」が教育であること、③「教育は形成の一要因であって、前者が後者にとってかわることはできない」性質を有することを提起した。
- 6) ただし、こうした「生の声」を分析の材料とするにあたっては、必ずしも調査者側が意図する発言が含まれない、もしくは未整理な状態で語られることもあるため、発言の前後の文脈や発言者の関係性や背景等からの解釈が求められる。それらの理解のため、調査者は本研究に着手以前から定期的に園を訪問し、保育や子どもの様子を観察するとともに、保育者等からの情報を得ることで対象者の理解を図った。インタビュー調査の検討にあたっては、桜井(2002)や佐藤(2008)などを参考とした。
- 7) 201X年度の懇談会の時間は1クラス平均2時間07分で、0歳児クラスを除くすべてのクラスで予定の2時間を超える。最も時間が長かったのは3月1歳児クラスの2時間53分であった。年間平均時間をみると、1歳児クラスが2時間50分で最も長く、次に5歳児クラスの2時間13分であった。なお、時間は、ICレコーダーの記録時間をもとに算出しており、無言や園や親からの連絡事項の伝達等も含まれる。
- 8) 参加者数は、きょうだい児が在園する親も含んでおり、実際の在園児の世帯数とは異なる。また、懇談会には夫婦一緒に参加や各回で父親もしくは母親が出席するといったケースもあったため、各世帯からの参加を出席者数としてカウントした。
- 9) 正統的周辺参加論について、遠藤(2005)は『実践共

共同体で学習者が十全的参加に移動していくことが静態的文脈で起こっているわけではない』『実践そのものが動きのなかにある』と書かれていることから、参加や実践共同体自体も変化・変容していくものであり、向かうべきものが固定化されないことが分かる。そして学習者の参加することが共同体を変化させ、また学習者自身の変化が共同体にも変化を生み、さらに参加者が入れ替わることも共同体への変化をもたらす」と述べ、正統的周辺参加に対する「実践共同体への同化」とする解釈を批判した上で、こうした解釈を超える課題として、「学習者相互の補完が学習となるべく、『実践者間の見解の不整合や対立』を『学習内容の構成要素』として怖れず見なしていくには、実践共同体内で生起している学習を横断的に観察・分析することが問われる」と指摘する。

引用・参考文献

- 秋田喜代美 (2010) 「はじめに」 「保育プロセスの質」 研究プロジェクト『子どもの経験から振り返る保育プロセス — 明日のよりよい保育のために —』 幼児教育映像制作社、p.1-2
- 飯野祐樹 (2018) 「ニュージーランド幼児教育政策における「質保障」「質評価」の展開過程に関する研究 — テ・ファーリキと歩んだ20年に焦点を当てて —」 日本保育学会『保育学研究』第56巻第1号、pp.56-67
- 池本美香 (2014) 『親が参画する保育をつくる — 国際比較調査を踏まえて —』 勁草書房
- 遠藤ゆう子 (2005) 「『状況に埋め込まれた学習正統的周辺参加』を読む — 学習と学習環境デザインを考える —」 『言語文化教育研究』3巻、pp.226-236
- J. ヘックマン (古草秀子訳) (2015) 『幼児教育の経済学』 東洋経済新報社
- J. レイヴ・E. ウェンガー (佐伯胖訳) (1993) 『状況に埋め込まれた学習 — 正統的周辺参加 —』 産業図書
- 家庭教育支援の推進に関する検討委員会 (2012) 「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」 文部科学省
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター (2006) 「子どもの成長過程における発達資産についての調査研究報告書」
- M. カー (大宮勇雄・鈴木佐喜子訳) (2013) 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする — 「学びの物語」 アプローチの理論と実践 —』 ひとなる書房
- 丸亀ひまわり保育園・松井剛太 (2018) 『子どもの育ちを保護者とともに喜び合う — ラーニングストーリー はじめの一步 —』 ひとなる書房
- 宮原誠一 (1949) 「教育の本質」 『宮原誠一教育論集第1巻 教育と社会』 (1976)
- 宮本知子・藤崎春代 (2015) 「保育参加後における父親の語りの縦断的研究 — 父親が子どもの園生活にかかわることによる視野の広がり —」 日本保育学会『保育学研究』第53巻第2号、pp.96-107
- 永田誠 (2019a) 「本研究の成果と課題」 『子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」研究成果報告書』 科学研究費助成事業基盤研究 (C) (課題番号: 15K04309) pp.10-13
- 永田誠 (2019b) 「親の「語り」を通した子育てにおける「学び」 — クラス別保護者懇談会における家庭生活に関する内容に着目して —」 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第19号、pp.23-39
- OECD (2011) 『保育白書 — 人生の始まりこそ力強く: 乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較 —』 明石書店
- 大豆生田啓友 (2016) 『「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語 — 子ども主体の保育の実践と環境 —』 学研教育みらい
- 大宮勇雄 (2006) 『保育の質を高める — 21世紀の保育観・保育条件・専門性 —』 ひとなる書房
- 大宮勇雄 (2010) 『学びの物語の保育実践』 ひとなる書房
- 大村綾 (2018) 「保育園の保護者支援における親の気付きに関する考察 — 「一日保育士体験」活動に着目して —」 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第18号、pp.33-42
- R.Lerner・P.Benson (2003) 『Developmental assets and asset-building communities: Implications for Research, Policy, and Practice』 Kluwer Academic/Plenum Publishers
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学 — ライフストーリーのきき方 —』 せりか書房
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 — 原理・方法・実践 —』 新曜社
- 島津礼子 (2014) 「幼稚園における「保育参加」における学びの生成について」 日本保育学会『保育学研究』第52巻第3号、pp.34-44
- 汐見稔幸 (2016) 「子育てと保育」 日本保育学会『保育学講座1 保育学とは 問いと成り立ち』 東京大学出版会、p.7-40
- 首藤美香子 (2009) 「OECD の ECEC 政策理念と戦略 — “Starting Strong II :Early Childhood Education and Care” (2006) —」 国立教育政策研究所紀要第138集、pp.239-256
- 立田慶裕・岩槻知也 (2007) 『家庭・学校・社会で育む発達資産 — 新しい視点での生涯学習 —』 北大路書房